



アカシア俳句会



令和四年 夏季俳句会 「句評」 兼題：梅雨(含・子季語) 夏の季語の句

一、「特選句」 選定句評

○タケノコを食(ハ)める幸せ老いの膳 吉澤志保子

◆ 歯科医師戸堂博之の特選句。六月四日はむし歯予防デーと天安門事件の日。「六月は会う人毎に歯の話」です。 戸堂博之

◆ 実感のこもった句で、タケノコを気持ちよく食べる様子が目に浮かびます。 都 福仁

◆ 春の味覚筈を味わえる幸せ、あの独特の食感を自分の歯で噛んで楽しめる幸せ、喜びが伝わります。 野本展子

○石突(杖の先)や滑る石庭梅雨ながし 戸堂博之

◆ 心に通じるところがありました。 岩崎悦子

○さくらゆき友逝き梅雨の頃となり 山家由紀

◆ 美しかった桜の花が散ってしまい、親しい友達が亡くなってしまつて、うつとうしい梅雨の季節になりました。 楠野圭子

○カメちゃんとよぶ友失せて梅雨に入る 山家由紀

◆ 実感のこもったとてもいい句だと思います。無事に富岡隆夫さんとお会いになれたかお訊きしてみたいものです。 吉澤志保子

◆ 二月に八五年間で初めて電話で小学校時代の思い出を明るく語り合い、三月突然訃報に接した人の句でした。 三木徳彦

◆ 今までに何回呼びかけ、楽しく話し合つたことでしょうか。その友を失つた寂しさが梅雨の季語にピッタリと思いました。 加龍恵子

○汗拭ふ箱根の関に蔭を得て 佐藤多恵子

◆ 作者の実体験か、想像の句か分かりませんが、「蔭を得て」に心を動かされました。 中野亘子

○葉さやぎの音のさやかに朝散歩 吉田以登

◆ 「さ」の音の繰り返し効果を活かし、初夏の爽やかさを描写した心地よい秀句です。 前田秀一

○自転車の子等がしまなみ初夏の風 都 福仁

◆ 単純といえるほどの素直な句。でも、その清新さ、さわやかな若い力にひかれました。 山家由紀

○亡夫（つま）のこと恋ふる句遣し友逝けり 中野亘子

◆本当に仲の良いご夫婦だったんだなという尊敬の気持ちと、良い友を失くした寂しさが、同感でよく伝わりました。

吉田以登

◆冷静的確リズム良く。偶その前夜久々にベルが鳴り一文字の重さ、四方山の事も。亡夫の傍へ早くと、切々と。

網 佑子

○雨坊主竿に整列梅雨に入る 中野亘子

◆てるてる坊主が雨に濡れて恨めしそうに眺める顔が浮かびます。竿に整列した情景が見えてよいと思いました。

元永悦子

○水たまり嬉々とジャブンと遠き日の 網 佑子

◆子どものころを想い出すと同時に、今の子どもも変わらないなあと思いました。水たまりが少なくなりました。

佐藤茂弘

○梅雨ごもりスマホや見入る指遊び 前田秀一

◆スマホの登場する句が多くなってきたように、私も指で友を呼ぶという表現を候補にしたものでした。

岩壺克哉

○赤き薔薇照れをり妻の傘寿の日 前田秀一

◆自分もやってみたい！ 西村敏治

二、総括講評 私が選んだ句 佐藤多恵子（元「京鹿子」俳句会同人）

特選

選句番号	佐藤多恵子「選句」作品	作者
八	カメちゃんとおぶ友失せて梅雨に入る カメちゃん（富岡隆夫氏夫人、旧姓亀岡）の急逝を知った時の驚き、悲嘆が「失せて」に表現されている。信じられないうちに、早梅雨入りとなり、追慕の念が募るのだろう。	山家由紀
二〇	シャンソンの余韻交じりのはしり梅雨 「シャンソンの余韻交じり」と捉えた感性が素晴らしい。季語がよく働いている。	加龍恵子
二九	くちなしの雨粒とどめなほ白し くつきりと白さを保つくちなしの花を写生した句。俳句において写生は大事なことだ。	加龍恵子

二、「編集後記」

◆岩壺克哉さんと西田 稔さんが、今回から「投句」会員として参加されました。お二人の挑戦を歓迎します。

◆山家由紀さんと中野亘子さんから、去る三月十九日に心不全のため急逝された富岡訓子さんを偲ぶ作品が投句され、「特選」の句評に六人の方々からありし日を偲ぶお声が寄せられ哀悼を深かめました。とりわけ、三木徳彦さんは、一ヶ月前（二月十九日）富岡さんと電話で小学生時代のころの思い出にふけられた由、富岡訓子さんからは目の患いのことも教えていただいたと取次のお礼とお喜びのお電話をいただき衝撃的でもありました。

◆森本 寛さんから、戸堂博之さんを通して「アカシア俳句会」の皆さんへ、NHK・BS・クールジャパン「俳句」番組（五月八日午後六時〜六時四五分放映）収録映像（DVD）をご提供いただきました。視聴ご希望の方は戸堂博之さんへお申し出ください。

内容は、日本への留学生たちの短詩系「俳句」の受け止め方、文化的意義および「季語」の助けを借りて景色を描写し作者の感動を伝える短詩（俳句）の表現のあり方を教えるもので、私も「俳句」の基本について気付かされました。

特に、「季語と俳句歳時記」の項では、当会で規範としている「季語―非凡の一節を支えるもの」（『抄録・重次俳句論』（実践論）収録）の意義を噛みしめました。

◆今は亡き富岡訓子さんから、土生重次さんの季語例句掲載について以下のご紹介がありました（当会ホームページ「会員交流の『場』」）。

四十代の初めころでしょうか、土生重次さん、夫・隆夫、私との三人が銀座通りを歩いていた時、土生さんがポツリと「俺、俳句『歳時記』に載った」と言われ、隆夫が振り返り「凄いなね!」と申し、俳句に疎い私は黙っていたように思います。土生さんと隆夫は、互いに親しすぎて、「誘わず」、「応じず」の関係のまままで親交が続いていました。

夏（天文）「雲の峰」 峰雲や朱肉くろろずむ村役場 土生重次

出典：角川書店編集二〇一二年（第二九版）『新版季寄せ』一〇八頁 角川学芸出版



この句は、『俳壇』二〇一六年七月号 保存版・俳句誌上句集「土生重次一〇〇句」をはじめ、多くの句集で傑作として紹介されています。

◆今回から中野陽典さんに代わって「兼題」の出題と「気付きのひとこと」などご指導いただいている佐藤多恵子さんは、かつて所属されていた「京鹿子」俳句会（*）五〇周年記念出版『歳時記』に以下二三句が掲載されたことをご紹介されています（当会ホームページ「会員交流の『場』」掲載）。

*一九二〇年、京都帝国大学・第三高等学校俳句会を基盤として発足。鈴鹿野風呂・日野草城を中心に

『京鹿子』を創刊 吉田以登さんの御祖父も同人でした。「いと」は、高浜虚子夫人と同名だそうです。



名 京鹿子
宰 豊田都峰
創 大正9年11月
師 系 高浜虚子
発 千606-8313
行 所 京都府京都市左京区吉田中大路町8-1
鈴鹿野風呂記念館内
代 1000円
主 張 宇宙広漠に万象の生命と共に遊ぶ酒脱をめざす
既 刊 号 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12



季語

「京鹿子」五〇周年記念『歳時記』掲載句

「春」

春の宵
目刺
花見
蠅生る

春宵や山菜の膳次の間に
早口の宣伝カー来ぬ目刺し焼く
花疲れ鍵は夫にまかせあり
蠅生る妻と呼ぶることに馴れ

佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子

「夏」

飯籠る(めしむせる)
万緑
薔薇
枇杷
薄暑
サルビヤ
草いきれ
裸

飯籠る人をうとみて二三日
万緑や通天閣の午報鳴る
薔薇一輪コップの中の目の戯れ
旅疲れ枇杷のはしりを街に見し
夕薄暑魚焼く顔は歪むもの
サルビヤ燃ゆ受胎を知りしときめきに
一斉に午笛上がるや草いきれ
裸子の質問一日つきまとふ

佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子

「秋」

秋
花野
冬隣
菊人形
柿
林檎

胎教を今日より秋の心とす
赤き靴買ひぬ花野を歩くため
二人目は負はれて育つ冬隣
菊人形宙を見つめしまま暮るる
出羽三山雪と便りの柿荷着く
りんごの皮断たじ胎児と吾の刻

佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子

「冬」

風花
年用意
年の市
白菜
靴(あかぎれ)

大阪の水の濁りに風花す
年用意すみぬ時計を正しうす
煽られて小さき我や年の市
白菜の見事な渦を真二つ
手はいつも五体の従者あかぎれて

佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子
佐藤多恵子

編集人 前田秀一